

齊藤茂吉全集

第三十卷

齋藤茂吉全集

第三十三卷

第二十三回配本（全三十六卷）

齋藤茂吉全集 第三十三卷

定價 千八百圓

昭和四十九年十一月十三日發行

著者 齋藤茂吉

發行者 岩波雄二郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩波書店

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

書
簡
一

目次

明治三十一年	一
明治三十二年	八
明治三十三年	二六
明治三十四年	二七
明治三十五年	四一
明治三十六年	四三
明治三十七年	四八
明治三十八年	五〇
明治三十九年	七一
明治四十年	一二〇
明治四十一年	一二六

明治四十二年		一三三
明治四十三年		一五六
明治四十四年		一六六
明治四十五年（大正元年）		一八七
大正二年		二〇〇
大正三年		二一八
大正四年		二四二
大正五年		二六三
大正六年		二九二
大正七年		三二九
大正八年		三四〇
大正九年		三七一
大正十年		四〇八
大正十一年		四五六
大正十二年		五二七

大正十三年		五九
大正十四年		六五
大正十五年（昭和元年）		七二
後記		七三

明治三十一年

一 〔七月二十六日 相模國足柄上郡山田村 渡邊幸造君御机下 淺草自宅より〕

御書面之趣^{〔原〕}承知候貴君今や黃塵萬丈の都門を去つて田頭の漣は暑を忘れ蟬聲流れに和するの處に意想を養ふ貴君送る處の玉章讀み始め讀み終りて羨慕ノ念^{〔不問〕}々々として起りあるは故郷の事など思ひ出でられ歸省せしなば如何なる哉など夢にも見る事度々有之申候今や當地は雨なく雲なく日々炎帝益々驕心をたくましくし苦熱／＼の音は處々に起り氷など食するもいかでか堪い難からん誠に開口頓首再拜とでも言ふ様の外有之勉強など只以ての外日日毎日午睡グ／＼睡むればはや日西山に没するの時夜は蚊でふ虫のいと多くとても勤學などの勤の字も出で申さず候庭園の草木迄輝り／＼されて誠に哀れはかなき狀況に御座候井水なども涸れ果て何處の井水でもキド口占める有様に候然るに貴兄今や何たる快樂ぞ何たる樂みぞと思ひば又々その念起るも敢て過考には無之候流行病も力を強むる前微も有之病人も益々加はる有様に御座候余の病氣まで御心配にあづかり感涙にむせび申候今や病魔去つて正にピン／＼小僧の仲間にも入らむ有様に御座候間愚心ながら御安心被下度候兼て報ありし廿五日の午前八時にもなりぬればまたかくの如く試験の成績など聞くに出校するも何となく恥辱の念生ずれと少々用事の有之候まゝ一寸立より申候處出校する人は十數人に過ぎずしてやがて佐藤部長は出席致連名朗々と讀ませられたり冀くは又一見をわづらはす事を 注意（名は一番ヨリ順席に書ス其下に番號あるは三級全體の番號に候御注意迄）菊地（5） 吹田（7） 山崎（新入生） 井松、（不書） 小寺（不書） 山本（19） 新井（21） 山下（28） 遠江（34） 山内（38） 石垣（42） 高濱（50） 十枝（51） 田藤（53） 勝守

(54) 松宮 (55) 豐島 (56) 大澤 (66) 井上 (68) 辻生 (70) 小島 (72) 百瀬 (74) 曾我 (75) 長濱
(76) 稻葉 (80) 笹子 (82) 高木 (85) 白石 (86) 川村 (87) 森根 (88) カミ山 (91) 井田 (92) 加福
(96) 酒卷 (97) 小室 (98) 片岡 (103) 野口 (105) 高安 (106) 近藤 (108) 渡部 (109) 平山 (110)
菅沼 (111) 奥村 木村 久留 加藤 遠武 柴山 田中 酒井 高田 (以下不書) 今是に全評を下せず三級
一たるもの正に全體三級の一番ならざるべからず然るに5號とは又遺憾の至りに御座候は度の試験は實に千變
萬化にて誠に不計のものに御座候蓋し千古の英雄たる貴兄不運にも病魔のおかす處と相成空しく雲を得ずして
千尋の淵に望むは何ぞ亦無情なる哉、今見よ第二學期の試験には貴兄正に黒雲を得て旭日は期して敢て是度の
我級の惡結果を悲まざる處なり小生の如きボンヤリ野呂にても是度の學年試験には三級一より一番二番迄も出
たしたく存候貴兄正に拳腕をふるひ候ひ 又二月の長日も夢の如くに過ぐるならむ時に再會の上拜顔あらむ事
を望む先は拙筆を動かす事斯の如し 早々頓首 七月廿六日夕つかた 齋藤茂吉 渡邊大兄

二 (十月三十日 臺北守備隊獨立歩兵第八大隊第四中隊 守谷富太郎様親展 淺草自宅より)

萬里の波濤を打蹴りつゝ雲山異域の野邊に身をさらし我故郷の如きは秋風吹いて袂寒く寒い／＼と言ふなるを
御地は如何ならむ九夏三伏の候もいかで叶はむ彼かる處に身を分毛の輕きに置きて國家をヒマラヤの重きに居
く心中鬼神の如くなるらん斯くてこそ神州男兒の本分と存候へば迄は罪み申さず候食は惡しく不潔きわまる
土中に夜も、はかなき夢さへ結ばずに斥候の大任務盡され遊されて如仰山川異なる異郷の月をながめつゝ夜も
ほの／＼と明る迄とは實に／＼余の如く花の都に安臥して起きて寐て食して飲んで居るものを兄上様の御しん
苦思ひばげに暗涙潸然たらざるを得む是も思ひかれを考ふるもまた斷腸の種ならぬは無之候あはれ神國男兒の
本分としてかゝる重き任務を盡さるゝは同じく人に生れながらそも如何なる事ならむ故郷の父兄弟妹等もさぞ
かし心配致され居り候も計り難き候へば時々御手紙を送れん事を 病も流行の由愚弟ながら御注意あられん事

を願上候または御地にては種々の珍事怪事も有之候へ共願はくは日記に診らしきものを記し下され候て御置き被下度願上候例の如く御會面能はずして實に無念の至にて候へ共又國家の爲めとあきらめ申候廣島の御手紙には種々の面白き富士の高峯の秀でたる須磨や明石の濱づたひ敦盛郷の噴をか忍ばれしならん實にうらやましく候へ共、八重の波路を破りつゝ無事御着の事は何よりの御慶事に御座候尙書きたき事多く有之候へ共なほ後の便書にこまゝと書き記し申べく候あつばれ御任務盡されて御歸京の程待上候今や東京は秋冷の候紫菊黃瀾の候とは相成申し種々の紅葉今を盛りと焼え居り候

兄上は雲か霞かはてしなき異域の野べになにをしつらん

此事も君の爲めなり國のため異境の月も心照らさん

愚詠御察被下度願上候 頓首再拜 十月三十日の夕べ 茂吉弟拜 書面は七日にて着し申候 異境臺北なる兄上様

三 (十一月二十六日 臺灣守備隊歩兵第八大隊宜蘭第四中隊附 守谷富太郎様乞親展 淺草自宅より)

頃は十一月二十二日夕陽西山に傾きて晚烏いそぎて己巢を尋ね秋風袂寒々しきを思ひつゝ學校より歸れば机上一通の音信あり是れ果して誰の手紙なるや讀み初め讀み終つて委事頭底に入り申候手紙の到着するには十日ばかりもかゝると存じ申候愚弟の出した書面は到着候哉兄上様には御轉地の爲め或は到着致さざるやも計り難く申候峯巒萬岳の聳ゆる深山にこの度御轉任遊ばされ何一つ樂むもの無之候事げに愚弟等の想像し能はざる事に御座候、弟等の如きは上野の花や隅田蓮湖の月愛でつ賞しつ身は安座豐食して苦の何ものたるを知らずして空しく年月を送るに、然かも身には軍銃を負ひ銃剣をたばさみ戰地にある兄様の事は如何ばかりならむ、是度は土匪の患も無之候由愚弟も蔭ながら喜び居り候是迄何か御送り申べく思へ候へしかど所謂軍地に候へば餘暇無之と思ひ且時々は轉地あらせらるゝ事に候へば送らざる次第に候是轉地あらせるゝ時には御報知被下度候愚弟

も何事無事勉強罷在候來月中旬頃より試験も始まり事に御座候目下東京は雨天曇天のみ引き續き昨今の如きは雪のふり候て寒氣嚴烈堪え難く爲めに寒冒の病におかざるゝ者多く候我故郷の如きは今や白雪皚々として白く爲めに農夫の驚き一方ならざるべし故郷よりは通知なし、雜誌少年文集は是度中學世界と改まり惡しく相成候又年に四回ばかり文年文壇發行に相成候由去る二十日初刑に相成候間御地の如き何にも樂みなき時は種々に文を以て書して其の狀況を記し時にふれ期にふれて文を草し日記を附き居き候はゞ如何ばかりか樂しからむと存じ候願はくはその他植物の如き何にても珍らしきもの御取り居き被下度候その他何か面白きものを時々送るべく候太陽は大にして且つ政治にわたり面白しからずと存候間送らず候先は御返事迄如斯に御座候氣候不順の候御自愛專一と存候 頓首不一 少年文壇少年俱樂部當分送るべく候

偶感

宜蘭の町の西東 風も本土の風ならず

我がふる郷は秋風の

くるひ起りて虫の音も

消えてけるかな

玄霜の草の上へと横はり

千山萬岳もろともに

からくれなゐの紅葉ばに

秋はくれぬと云ふものを

故郷を隔つ千萬里

綠樹音なく繁りつゝ

袂つゞしきあしたには

異郷の月を眺めつゝ

光りおぼろの星影も

我故郷の父母の

戀しき土地を示すらん」

十一月二十六日 もきつ拜 臺わん宜蘭 兄上様

四 (十二月九日 相模國足柄上郡山田村 渡邊幸造君御机下 淺草自宅より)

玄霜屋上にいや白くきり／＼すつゞれさせてふ音も消え失せて朝夕寒氣をかこつ候とは相成候市來崎兄の報によれば雅兄今や都門を去つて戀しき故郷の土に歸省なされ朝は清けき風にうそふき夕には皎々たる明月にあこがれて英氣を養はれ居るゝとの御事かつは一家和氣謐々たる中に起臥なされ候事誠に欣慕の念も起り申候然れども貴兄の病氣御全癒の事蘊ながら喜び申居候彼の拔山蓋世の英雄と雖も不運の時に際會し空しく芳名を萬世にとゞむる事あり雅兄あはれ病魔の爲めにおかされて空しく休校遊ばされ今や故郷の空にありて君と相見るの能はざるに至る然れども貴兄上京の御節萬々御話申べく候尙御上京の節は何學校に御入學遊ばるや若しも案筆も有之候はゞ御一筆に□^{不明}ならざらん事を 東京は目下曇天相續き誠に困却仕り候試験の如きも十三日より始まる事に候へばいと髪間の事と存候へど何分不勉強の結果相見へて誠に困却致し居り候、御拜借の雜誌御返上仕り御賢弟に御渡し申候尙後來も愚生も朋友の一人として御教訓被下度萬鳳雛の中の雀とにても見なしてゆる被下度候先は蒼卒の際に當り愚筆動々御安否を御察門奉る願はくは雅君御一筆被下度候粗筆御免 十二月九日 歸校の時 頓首九拜 齋藤茂吉 渡邊學兄机下

五 (十二月二十九日 臺灣宜蘭守備隊歩兵第八大隊第四中隊 守谷富太郎様乞親展 淺草自宅より)

貴墨拜見仕り候、日本名勝記の手紙（兄上様の十一月十六日出ス）は十一月三十日に着き申候又雜誌到着の御返事（十二月十一日出）は十二月二十一日に到着仕り候誠に御地の御事推察仕り水牛の事などいとも面白く讀み申上候「嗚呼罪なりき罪なりき書籍御尋ねの御手紙（十二月十六日御出）は今日即ち十二月二十九日午後二時半に到着仕り讀み上げ仕り候條で前の書面は實に到着仕り候にて決して途中等にて粉失致さざる次第に御座候其れよりは種々の書籍を送らむと思ひ種々に尋ね仕り居り候て實は十一月三十日に到着仕り候へしものも日々延びと相成毎日一冊程づゝ買ひ仕り候て十二月十七日程（明カニハ忘レ候）正に小包郵便にて送り仕り左の受取ヲ取り申候十二月十五日ナリ

主人 氏名 富田 三三三	番 三三三	重 三三三	印 三三三	日 三三三
				

心に留め申候若しも其の小包一月十日程迄到着致さざる節は土賊の爲めと思ひ新に御送り申候間其節は一寸御

報知下されて惡からず御思召被下度候願上候也我故郷よりも金五圓送り候て其にて又一月に相成候はゞ種々の
 雜誌（太陽等）送るべく候。寒翁の馬上足速く冷風袂に通ひて秋を知り玄霜身に徹して冬となり嗚呼今又是に一
 歳を贈らんとす、春草の芳夢醺めざるに又々梅花ツボミを開き鶯の如きも時に枝に鳴き初むるなり町中市中振
 はして新年の用意に級々たり愚弟の試験も十三日に初まり二十一日に終へり成績は甚だ悪しく今迄は入學以來
 かゝる悪しき成績取りたる事なく誠に辱かしく候。番に相成候然れども男兒苟も氣あり血あり何ぞ一時の失敗
 に落膽せざん哉尙此後も勉強仕るべく候間惡しからず思召願上候永澤幾次郎の如きも徐隊と相成候て、意氣揚
 々として歸郷仕り候（上等兵）彼等も又土百性にて世を終ふるならむ尙書きたき事は有之候へど其は後年に譲
 り今は只御通知に及び候のみに御座候」はや新年の元且も明後日に候へば今より新年の賀を申上候居き候 謹
 賀新年 身體健康萬事好運を祈る 頓首二拜 明治卅一年十二月廿九日午後五時 東京淺草東三筋町五十四番
 地 齋藤茂吉 於宜蘭 守谷富太郎兄上様 御机下御□□下 我が向ひの永澤幾次郎松原の古頭二人は去ぬる
 一日遂に除隊となり欣喜の至りにて一は上等兵下士適任証等貰ひたりとて喜び居り種々の証書等貰ひて意氣陽
 々鼻三尺の心地して遂に故郷の土に歸り申候先は御通知迄 早々

明治三十二年

六 〔一月七日 臺灣宜蘭守備隊歩兵第八大隊第四中隊 守谷富太郎様親展 淺草自宅より〕

謹賀新禧 ほの／＼と明るく朝日の影赤く明治卅一年も夢の如くに消え果て、歳暮の感に悲き事など歌も忘れ候て今やあら玉の年はかへり屠蘇三杯傾けて難煮にやせ腹こやし、三ケ日も流れ失せにけり門邊には緑の松の色深くなびく朝日の旗赤し老若男女へだてなく共々腹のつゞみを打つならむ、庭には女兒の羽子の音かしましく風の鳴る音空中にひゞく内には歌かるた、花合せなどなして互に勝負争ふめり觀音様へと指づれは老若男女相交へ恰も蜘蛛の子を散らすが如し、鬚髪をひねりつゝ高ぶりありく^{〔原〕}伸士あり頭に中の字の帽子を戴いて歩る少年あり身なりかざりてたよ／＼と風柳腰にあらわしてこびつゝありく婦人あり令嬢あり番頭あり商人あり或は夕べの飯さへ食し兼ねて顔を青めつゞれをまとふてよろめく乞食あり。嗚呼上に伸士ありて華美をきわめ下に乞食ありて餓死せんとすあはれ何ぞ無常なる、實に千熊萬狀名狀すべからず愚弟も金龍山に指で、一年の安寧幸福好運を祈り合セテ兄上様の御無事を願ひ處々とめぐりて上野に至りバノラマに戌辰の當時の勇戦を思ひ共に古の大和武士の事などそゞろに思ひ出されて袂を濕せり其の勇戦の有様げに目前に有之候又は動物園に世界の動物をながめ散歩仕り申候兄上様などは如何に目出度く新年を祝ひ候や、偕て學校も明後日より初る事に御座候又新年の御年玉として、二、三冊の雜誌送るべく候、陸軍の光一冊 中學世界一冊 中學新誌一冊 旅の友一冊 但し一時に送らず候に付一日程後るゝやも計り難く候間左様御承知被下度願上候、先是新年御祝ひのしるしまで如斯に御座候 頓首再拜 明治卅二年正月六日夜 淺草區東三筋町五十四淺草醫院内 齋藤茂吉弟

宜蘭城 兄上様 太陽は後に送るべく候少し都合ありて
愚詠あり

日の丸の御旗もいとどなびくかな千代田の宮の新玉の年

金龍山に指でゝ

鳥だにも新に年をとりぬらん凌雲閣上とんびなくなり

かたはゝに墨のあとかた影見えて羽子つく子等のあら玉のとし

ほのゝと明くる朝日の影赤く神世ながらの年は來にけり

風の音や羽子や手まりの音清み松の雀も千々代とぞでなく

臺灣の新年を思て

我兄も宜蘭城外歌ふらん新高山もゆるぐはかりに

謹言

七 (三月一日 臺灣宜蘭守備隊歩兵第八大隊第四中隊 守谷富太郎様至念 淺草自宅より)

庭の木の葉は散り果てゝ東臺山下の鐘寒し隅田川原の月影も一天高し冬の空墨堤の櫻の花も春待ち顔に御座候
黃塵萬丈都門の街は風さいて海風そゞろに袂寒く御座候異境の野べに起き臥す兄上様今や如何なる御喜し遊ば
され候や一月二日御投函の御手紙は有難く拜見仕り候其後少しの雜誌送り申上候へしが到着致し候哉願はくは
御閑筆一封わづわしたく候何分千里の異境萬里の渡路千鳥も鳴かぬ宜蘭の事なれば書面の往復だに十餘日も要
する事なれば心中困居り候北風一陣音づれて東都の巷も數度の降雪皚々として寒き堪い難く有之候寒風は萬丈
の塵を卷き或は泥沼足をぼつし困難云ふべからず然れどもまた何かあらむ臺灣島頭宜蘭城外の有様を思へば何
とも思ひ申さず候六花繽紛たる中を冒しつゝ吾等は上野山下不忍湖畔雪戰をやり申候東北の健士相集りて圖南

の鵬翼相ふるひせめては黄泉の下草葉の蔭斷碑の下に怨を吞むてゐる東北の獨眼龍將軍をして地下一番喜ばしめん。又過日以來暴風黃巷を荒し火事と見誤り大に驚きし事も有之候今や葉もなき木々の梢に木枯らしのさけべどもけんこむ一轉和氣陽々として春氣をよふなし梅花一輪吹き初めて恰も恥らふ乙女の如くカツ夫人の未婚の時には似たり臥龍梅や龜井戸など時々刻々文人墨客の杖を曳くべく候嗚呼御地は如何なる有様にて有之候や兄上様如何なる御消光遊ばされ候哉蔭ながら推察仕り候へども新高山頂風荒み宜蘭城頭いかならん紀元の佳節來り候へども御地は如何なる有様にて有之候やランドセル銃や劍に草枕異境の野べに夢をか結ぶらん佐原隆應も少時上京いたし又歸國致し候又愚弟も勉強致し居り身體健康ビン／＼にて有之候作文資本その他の書物送るべく候へども先づ／＼兄上様の御安否をたゞして後御返事を載けば直ちに送るべく候何卒惡しからず思召被下度候又々この手紙清次第至急御返事なり御用向なり御記被下度候第一の願ひにて有之候先は時候御見舞迄如斯に御座候時々書面を送るべく存じ候へども實に是のたびは御無音に打過ぎ申譯無之候惡からず思召被下度候又兄上様の方にて二ヶ月も來ざるゆゑ心にかゝり斯くは言ふにて候 頓首多謝 明治三十二年三月一日の午後三時 齋藤茂吉拜す 守谷富太郎兄様

八 〔五月十五日 臺灣宜蘭守備步兵第八大隊頭園分遣隊 守谷富太郎様乞親展 神田自宅より〕

鳥兎忽に流れて速き飛鳥川花落も今は地に委して胡蝶も尙草むらに殘花を戀ふ老鷲のこゑも哀れにして橘かをるやどに杜鵑一聲天をかすめて飛ばむとす、東臺のあたり墨堤の岸白雲飄颻として彩霞水に流れ滿都の子女袖を連ねて舞ひつ歌ひつせし春の日も夢なれや新緑正に滴らむとして老僧は箒を手にして何事か呟やきつゝあるにあらず哉春の日の盛りも夢か幼かまぼろしか足の跡破りつる瓢箪のみ落花を吊ふなり萬里の月に嘯ぶくか將た樂むか大男兒の心中胸中將た計り難し、先づ／＼御健康御勤務の段何よりの事と遙かに喜び居り申侍り又別隊として黃波渺漠として水天鬢髻たる大海の濱に去りては歸る白波に戯れつゝ貝を拾ひ砂と遊び海國男兒の眞